

人生に自動ドアはない

校長 武井 正明

最高の音楽祭。ささやかな慰労会に向かう燕三条駅の改札口で「武井先生ですよ」背中から声がした。

シンヤのお父さん!!「シンヤのシンは木扁の『慎』ですよ!」すぐわかった。栄中時代の野球部の教え子のお父さんだった。

そこで少し話をして別れたが、偶然帰りの電車でも一緒になった。これはもう運命だ。

中学時代のシンヤは俗にいう「いい子」ではなかった。しかし彼には目力があつた。俊足で右投げ左打ち。リストの強さに、もう少し早く出逢っていれば投手にしたい素材だった。小学校時代はレギュラーでなかったが、私は3年の春に彼に一桁の背番号を与えた。

2年秋に県準優勝という好成績を収め、チームの反省と課題を各自に書かせた時、周囲との軋轢を気にせず、正論で珍しく長い文で彼は書いてきた。勉強の成績はお世辞にも良くなかった（悪かった）。進路は第一志望に落ち、公立に行ったが数カ月で辞めた。

大きな転機はバイク事故。彼はこのままではダメだと一念発起する。父親と探して見つけた長野の単位制の高校で高卒の資格を取る。そこから彼の人生は大きく動き出す。

現在はなんと東京汐留メディアシップで働きながら、企業の支援の下、信州大で数学の博士号取得に励む日々だという。論文の内容は私にはさっぱり理解不明の数学、そして全部英語だ。あのシンヤが!? 聞けば聞くほど信じられなかった。

「あの中学時代があつたからです。シンヤは武井先生のことを『恩師だ』と言ってます。今も帰ると私とあの時の野球部だよりを読んで『あの時こうだった』って話してるんですよ」

お便り取っておいてくださってるのか。嬉しいなあ…。俺のことを「恩師」だなんて。会いたいな、照れるな。本当によく頑張ったんだなシンヤ…。俺はお前が誇らしいよ。たいしたものだ。

彼の話聞いて改めて思う。みんな可能性は無限なのだ。どこで本気のスイッチを入れるか。シンヤは何度も挫折を経験し、きっと想像を絶する努力をしてどん底から這い上がってきたのだろう。打席から投手を見据える、彼のギラギラした眼を思い出していた。

彼は現在 29 歳。シンヤの人生はまだまだこれからだ。親御さんや周囲への感謝の気持ちを忘れず謙虚に元気で、日本の、いや世界の数学界のために頑張ってくれ!!

シンヤのお父様は、先に電車を降りると車内の私に何度もお辞儀をしてくださった。親というものはありがたいものだ。この夜は嬉しい、忘れられない夜となった。

